

用借靈怨

花鏡泉

青空文庫

婦人は、座の傍に人氣のまるでない時、ひとりでは按摩を取らないが、昔氣質の誰でもそう云う。上はそうまでもない。あの下しもの事を言うのである。聞では別段に注意を要するだろう。以前は影絵、うつし絵などでは、巫山戯たその光景を見せたそうで。――御新姐さん、……奥さま。……さ、お横に、とこれから腰を揉むのだが、横にもすれば、俯向にもする、一つくるりと返して、ふわりと柔くまた横にもしよう。水々しい魚は、真綿、羽二重の俎まないたに寝て、術者はまな箸ばしを持たない料理人である。衣きぬを透とおして、肉を揉み、筋を萎なやすのであるから恍惚うつとりと身うちが溶ける。ついたしなみも粗末になつて、下じめも解けかかれば、帯も緩くなる。きちんとしていてさえざつとこの趣。……遊山旅籠ゆざんはたご、温泉宿などで寝衣ねまき、浴衣に、扱しごき帯、伊達巻だてまき一つの時の様子は、ほぼ……お互に、しなくつても可よいが想像が出来る。膚はだを左右に揉む拍子に、いわゆる青練あおねりも溢こぼれようし、緋縮緬ひぢりめんも友染ゆうぜんも敷いて落ちよう。按摩をされる方は、対手あいてを盲めくらにしている。そこに姿の油断がある。足くびの時などは、一応は職業行儀に心得て、太脛ふくらはぎから曲げて引上げるのに、す

んなりと衣服きものの褌つまを巻いて包むが、療治をするうちには双方の気のたるみから、踵かかとを摺ずり下がって褌が波のようにはらりと落ちると、包ましい膝のあたりから、白い踵が、空にふらふらとなり、しなしなとして、按摩の手の裡うちに糸の乱るがごとく縋もつれて、艶えんに媚なまめかしい上うわ搔がい、下搔したがい、ただまんじともえ巴まじに降る雪の中を倒さかしに歩行く風情になる。バツタリ真暗まつくらになつて、……影絵は消えたものだそうである。

——聞くにつけても、たしなむべきであらうと思う。——

が、これから話す、わが下町娘したまちつこのお桂ちゃんけい——いまは嫁して、河崎夫人であるのに、この行為、この状があつたと言うのでは決してない。

問題に触れるのは、お桂ちゃんの母親で、もう一昨年頃故人なきひとの数に入つたが、照降てりふり町ちようの背負商しよいあきないから、やがて宗右衛門町の角地面に問屋となるまで、その大島屋の身代ふとつばら八分は、その人の働きだつたと言う。体量も二十一貫ずツしりとした太腹ふとおで、女長兵衛たてと称なづえられた。——末娘すえつこで可愛いお桂ちゃんに、小遣こづかいの出振だしつぷりが面白い……小買みせさきものや、芝居へ出かけに、お母さんが店頭みせさきに、多人数立働く小僧中僧わかしゆ若衆わかしゆたちに、気は配つても見ないふりで、くくり頤あごの福々しいのに、円々とした両肱りようひじの頬杖ほおづえで、薄眠りうすみをしている、一段高い帳場の前へ、わざと澄ました顔して、（お母さん、少しばかり

。黙って金箱から、ずらりと拵出して渡すのが、掌が大きく、慈愛が余るから、……
 瘦きすで華奢なお桂ちゃんの片手では受切れない、両の掌に積んで、銀貨の小粒なのは
 指からざらざらと溢れたと言う。……亡きあとでも、その常用だった粗末な手ぶんこの中
 に、なおざりにちよつと半紙に包んで、（桂坊へ、）といけぞんざいに書いたものを開け
 ると、水晶の浄土珠数一聯、とつて十九のまだ嫁入前の娘に、と傍で思ったのは大違い、
 粒の揃った百幾顆の、皆真珠であつた。

姉娘に養子が出来て、養子の魂を見取つてからは、いきぬきに、時々伊豆の湯治に出掛
 けた。——この温泉旅館の井菊屋と云うのが定宿で、十幾年来、馴染も深く、ほとん
 ど親類づき合いになつている。その都度秘蔵娘のお桂さんの結綿島田に、緋鹿子、匹田、
 絞の切、色の白い細面、目に張のある、眉の優しい、純下町風俗のを、山が育てた白
 百合の精のように、袖に包んでいたのは言うまでもない。……

「……その大島屋の先の大きいおかみさんが、ごぶびんに思召しましてな。……はい、
 ええ、右の小僧按摩を——小一と申したのでござりますが、本名で、まだ市名でも、斎号で
 もござりません、……見た処が余り小こいので、お客様方には十六と申す事に、師匠も言
 いきけてはありますし、当人も、左様に人様には申しておりましたが、この川の下流の釜

ケ淵——いえ、もし、渡月橋で見えます白糸の滝の下……あれではござりません。もつとずつと下流になります。——その釜ケ淵へ身を投げました時、——小一は二十で、従つて色気があつたでござりますよ。」

「二十にならなかつたつて、色気の方は大丈夫あるよ。——私が手本だ。」

と言つて、肩を揉ませながら、快活に笑つたのは、川崎欣七郎、お桂ちゃんの夫で、高等商業出の秀才で、銀行員のいい処、年は四十だが若々しい、年齢にちと相違はあるが、この縁組に申分はない。次の室つき井菊屋の奥、香都良川添の十畳に、もう床は並べて、膝まで沈むばかりの羽根毛蒲団に、ふつくりと、たんぜんで寛いだ。……

寢床を這つて、窓下の紫檀の机に、うしろ向きで、紺地に茶の縞お召の拾羽織を、撫でがた肩にぞろりと掛けて、道中の髪を解放し、あすあたりは髪結が来ようという櫛巻が、房りしながら、清らかな耳許に簪の珊瑚が薄色に透通る。……男を知つて二十四の、きじの雪が一層あくが抜けて色が白い。眉が意気で、口許に情が籠つて、きりりとしながら、ちよつとお転婆に片棲の緋の紋縮緬の崩れた媚かしさは、田舎源氏の——名も通う——桂樹という風がある。

お桂夫人は知らぬ顔して、間違つて、愛読する……泉の作で「山吹」と云う、まがいも

のの戯曲を、軽い頬杖で読んでいた。

「御意で、へ、へ、へ、へ、」

と唯^{ただいま}今の御前^{ごぜん}のおおせに、恐入^{こいり}った体^{てい}して、肩からずり下^{くだ}って、背中でお叩^{たた}頭^づをして、ボンと浮上^{うきあ}ったように顔を擡^{もた}げて、鼻をひこひこと行^やった。この謙斎坊^{けんさいぼう}さんは、座敷は暖かだし、精を張^はって、つかまつたから、十月の末だと云うのに、むき身絞^{しぼり}の襦^{じゆ}袢^{ばん}、大^{おお}肌脱^{だぬぎ}にな^なって、綿八丈^{わたやう}の襟^{えり}の左右^{はだ}へ開^{ひら}けた毛だらけの胸の下から、紐^{ひも}のついた大蝦^{おおが}蟄^{まぐち}口^{はみだ}を溢^{はみだ}出^でさせて、揉^もんでいる。

「で、旦那^{だんな}、身投げがござりましてから、その釜ヶ淵^{かまがふち}……これはただ底が深いというだけの事でありまして、以来そこを、提^{ちよう}灯^{ちん}ヶ淵^{ふち}——これは死にます時に、小一^{せういち}が冥途^{めいど}を照しますつもりか、持^もっておりましたので、それに、夕顔ヶ淵^{ゆがふち}……またこれは、その小按摩^{せあそ}に様子が似ました処から。」

「いや、それは大したものだな。」

くわつ、とただ口を開けて、横向きに、声は出さずに按摩が笑って、

「ところが、もし、顔が黄色膨れの頭でつかち、えらい出額^{おでこ}で。」

「それじゃあ、夕顔の方で迷惑だろう。」

「御意で。」

とまた一つ、ずり下りざまに叩頭おしぎをして、

「でござりますから瓢箪ひょうたんふち淵うつむとでもいたした方が可よからうかとも申します。小一の顔かおつ

色きが青瓢箪を俯向けにして、底を一つ叩いたような塩梅あんばいと、わしども家内なども申し

ますので、はい、背が低くつて小児同然こども、それで、時々相修業に肩につかまらせた事もござ

りますが、手足は大人なみに出来ております。大な日和下駄おおきひよりげたの傾かしいだのを引摺ひきずつて、――

――まだ内弟子の小僧ゆえ、身分ではござりませんから羽織も着ませず……唯今頃はな、つ

んつるてんの、裾すそのまき上った手織縞つづらか何かで陰気な顔を、がつくりがつくりと、振り振

り、（びい、ぷう。）と笛を吹いて、杖を突張つっぱつて流して歩行あるきますと、御存じのお客様

は、あの小按摩の通る時は、どうやら毛の薄い頭の上を、不具かたわの鳥が一羽、お寺の山から

出て附ゆいて行くと申されましたもので。――心掛こころかけの可よい、勉強家で、まあ、この湯治

場は、お底様かけさまとお出入でいりさきで稼かせぎがつきます。流さずともでござりますが、何も修業と

申して、朝も早くから、その、（びい、ぷう。）と、橋を渡りましたり、路地を抜けまし

たり。……それが死にましてからはな、川向うの芸妓屋道げいしややに、どんな三味線が聞えまし

ても、お客様がたは、按摩の笛というものをお聞きになりますまいでござります。何のま

た聞えずともではござりますがな。——へい、いえ、いえそのままでお宜しゅう……はい。そうした貴方様、勉強家でござりました癖に、さて、これが療治に掛りますと、希代にのべつ、坐睡いねむりをするでござります。古来、姑しゅうとめの目ざといのと、按摩の坐睡は、遠島ものだといったくらいなもので。」

とばちばちと指を弾はじいて、

「わしども覚えがござります。修業中小僧のうちは、またその睡ねむい事が、大蛇を枕でござりますて。けれども小一のははげしいので……お客様の肩へつかまりますと、——すぐに、そのこくりこくり。……まず、そのために生命いのちを果しましたような次第でござりますが。」

「何かい、歩きながら、川へ落おっこちでもしたのかい。」

「いえ、それは、身投みなげで。」

「ああ、そうだ、——こつちが坐睡をしやしないか。じゃ、客から叱言こごとが出て、親方……その師匠にでも叱られたためなんだな。」

「……不断の事で……師匠も更あらためて叱言を云うがものはござりません。それに、晩も夜中も、坐睡つてばかりいると申すでもござりませんでな。」

「そりやそうだろう——朝から坐睡っているのでは、半分死んでいるのも同じだ。」

と欣七郎は笑つて言った。

「春秋の潮時でもござりましょうか。——大島屋の大きいお上^{かみ}が、半月と、一月、ずつと御逗留^{ごとうりゅう}の事も毎度ありましたが、その御逗留中というと、小一の、持病の坐睡がまた激しく起ります。」

「ふ——」

と云つて、欣七郎はお桂ちゃんの雪の頸^{えりもと}許^{もと}に、擦^{くすくす}つたそんな目を遣^やつた。が、夫人は振向きもしなかつた。

「ために、主な出入場^{でいりば}の、御当家では、方々のお客さんから、叱言^{しごん}が出ます。かれこれ、大島屋さんのお耳にも入りますな、おかみさんが、可哀相な盲小僧^{めくら}だ。……それ、十六七とばかり御承知で……肥満^{こえふと}つて身体^{からだ}が大いから、小按摩一人肩の上で寝た処^{ところ}で、蠟^{かまぎつ}螂^{ちよ}が留^{とど}まつたほどにも思わない。冥利^{みょうり}として、ただで、お銭^{あし}は遣^やれないから、肩で船を漕^こいでいなど、毎晩のように、お慈悲で療治をおさせになりました。……ところが旦那。」

と暗い方へ、黒い口を開けて、一息して、

「どうも意固^{いこじ}地な……いえ、不思議なもので、その時だけは小按摩が決して坐睡をいたさ

ないでござります。」

「その、おかみさんには電気でもあつたのかな。」

「へ、へ、飛んでもない。おかみさんのお傍そばには、いつも、それはそれは綺麗な、美しいお嬢さんが、大好きな、小説本を読んでいるのでござります。」

「娘ツ子むすこが読むんじゃあ、どうせ碌ろくな小説じゃあるまいし、碌な娘ではないのだろう。」

「勿もつ体たいない。——香都良川には月がある、天城山あまぎやまには雪が降る、井菊の霞に花が咲く、と土地ではやしましたほどのお嬢さんでござりますよ。」

「按摩さん、按摩さん。」

と欣七郎が声を刻んだ。

「は、」

「きみも土地じゃ古顔だと云うが。じゃあ、その座敷へも呼ばれただろうし、療治もしただろうと思うが、どうだね。」

「は、それが、つい、おうわさばかり伺いまして、お療治はいたしません、と申すが、此こ屋ちや様なり、そのお座敷は、手前同業の正斎と申す……河豚ふぐのようではござりますが、腹に一向の毒のない男が持分に承っておりますので、この正斎が、右の小一の師匠なのでご

ざりまして。」

「成程、しかし狭い土地だ。そんなに逗留をしているうちには、きみなんか、その娘ツ子なり、おかみさんを、途中で見掛けた——いや、これは失礼した、見えなかったね。」

「旦那、口幅くちはばつとうはござりますが、目で見ますより聞く方が確たしかでござります。それに、それお通りだなどと、途中で皆がひそひそ遣ります処へ出会いますと、芬ぶんとな、何とも申されません句が。……温泉から上りまして、梅の花をその……嗅かぎますようで、はい。」

座には今、その白梅よりやや淡青うすあおい、春の李すももの薫かおりがしたろう。

うっかり、ぷんと嗅かいで、

「不躰ぶしつけ。」

と思わずしやべった。

「その香の好よさと申したら、通りすがりの私どもさえ、寐ねしなに衣きものを着換えましてからも、身うちが、ほんのりと爽さわいで、一晚、極楽天上の夢を見たでござりますで。一つ部屋で、お傍にでも居ましたら、もう、それだけで、生命いのちも惜しゆうはござりますまい。まして、人間のいいなでも、そこは血氣ちのけの若い奴やつでござります。死ぬのは本望でござりましたろうが、もし、それや、これやで、釜ヶ淵へ押おっばまったでござりますよ。」

お桂のちよつと振返つた目と合つて、欣七郎は肩越に按摩を見た。
「じゃあ、なにかその娘さんに、かかり合いでもあつたのかね。」

二

「飛んだ事を、お嬢さんは何も御存じではござりません。ただ、死にます晩の、その提ちよう灯ちんの火を、お手ずから点つけて遣わされただけでござります。」

お桂はそのまま机に凭よつた、袖が直つて、八口やつくちが美しい。

「その晩も、小一按摩が、御当家へ、こつつりこつつりと入りまして、お帳場へ、精しやうり靈よう棚だなからぶら下りましたように。——もつとももう時雨の頃で——その瓢ひやう箏たん頭をを

俯向うつむけますと、（おい、霞の五番さんじゃ、今夜御療治はないぞ。）と、こちらに、年久

しい、半助と云う、送おく迎むかなり、宿引やどひきなり、手代ひようきんなり、……頑固で、それでちよつと

剽ひようきん軽な、御存じかも知れません。威勢のいい、」

「あれだね。」
と欣七郎が云うと、お桂は黙うなずつて頷うなずいた。

「半助がそう申すと、びしゃびしゃと青菜に塩になりましたつけが、（それでは外様を伺います。）（ああ、行つて来な。内じやお座敷を廻らせないんだが、お前の事だ。）もつとも、（霞の五番さん）大島屋さんのお上さんの他には、好んで揉ませ人はござりません。——どこをどう廻りましたか、宵に来た奴が十時過ぎ、船を漕いだものが故郷へ立歸ります時分に、ぽかんと帳場へ戻りまして、畏つて、で、歸りがけに、（今夜は闇でございます、提灯を一つ。）と申したそうで、（おい、来た。）村の衆が出入りの便宜同様に、気軽に何心なく出したげで。——ここがその、少々変な塩梅なのでござりまして、先が盲だとも、盲だからとも、乃至、目あきでないとも、そんな事は一向心着かず……それに、ひけ頃で帳場もちよつとごたついていたでもござりましょうか。その提灯に火を点してやらなかったそうでござりますな。——後での話でござりますが。」

「おやおや、しかし、ありそうな事だ。」

「はい、その提灯を霞の五番へ持つて参じました、小按摩が、逆戻りに。——（お桂様。）うちのものは、皆お心安だてにお名を申して呼んでおります。そこは御大家でも、お商人の難有さで、これがお邸づら……」

くしゃみでそこな
噓の出損った顔をしたが、半間に手を留めて、腸のごとく手拭を手繰り出して、蝦

墓口まぐちの紐からに搦からむので、よじつて俯うつむけに額ひたを拭いた。

意味は推するに難くない。

欣七郎は、金口きんぐちを点けながら、

「構かまわない構かまわない、俺も素町人だ。」

「いえ、そういうわけではござりませんが。——そのお桂様に、（暗闇くらやみの心細さに、提灯を借りましたけれど、盲に何が見えると、帳場で笑いつけて火を貸しません、どうぞお慈悲……お情なさけに。」と、それ、不具根性ふぐこん、僻ひがんだ事を申しますて。お上さんは、もうお床で、こう目をぱつちりと見てござったそうにござります。ところで、お娘むすめごは何の気なしに点けておやりになりました。——さて、霞から、ずっと参れば玄関へ出られますものを、どういふものか、廊下々々を大廻りをして、この……花から雪を掛けて千鳥に縫ぬって出ましたそうで。……井菊屋のしるしはござりますが、陰氣いんきに灯ともして、暗い廊下を、黄色な鼠の霜しもげた小按摩が、影のように通ります。この提灯が、やがて、その夜中に、釜ヶ淵かまがふちの上、土手の夜泣松の枝にさがって、小一は淵へ、巖いわの上に革緒かわおの足駄ばかり、と聞いて、お一方病人ひとかたが出来ました。……」

「ああ、娘さんかね。」

「それは……いえ、お優しいお嬢様の事でござります……親しく出入をしたものが、身を投じたとお聞きなされば、可哀相——とは、……それはさ、思召したでござりましょうが、何の義理時宜じんぎに、お煩いなさつて可いものでござります。病みつきしましたのは、雪にござつた、独身の御老体で。……

京阪地かみがたの方だそうで、長逗留ながとまりゆうでござりました。——カチリ、

と言った。按摩には冴さえた音。

「カチリ、へへッへッ。」

とベソを掻いた顔をする。

欣七郎は引入れられて、

「カチリ？……どうしたい。」

「お簪かんざしが抜けて落ちました音で。」

「簪かんざしが？……ちよつと。」

名は呼びかねつつ注意する。

「いいえ。」

婀娜あでな夫人が言った。

「ええ、滅相な……奥方様、唯今ではござりません。その当時の事で。……上方かみがたのお客が宵寐よいねが覚めて、退屈さにもう一風呂と、お出かけなさる障子際へ、すらすらと廊下を通つて、大島屋のお桂様が。——と申すは、唯今の花、このお座敷、あるいはお隣に当りましようか。お娘ごには叔父ごにならつしやる、富沢町さんと申して両国の質屋の旦那だんなが、ちよつと異おつな寸法のわかい御婦人と御楽おたのしみ、で、大いお上さんは、苦い顔をしてござつたれど、そこは、長唄のお稽古ともだちか何かで、お桂様は、その若いのと知合でおいでなさる。そこへ——ここへでござります……貴女あなたのお座敷は、その時は別棟、向うの霞で。……こちらへ遊びに見えました。もし、そのお帰りがけなのでござりますて。

上方の御老体が、それなり開けると出會頭であいがしらになります。出口が次の間で、もう床の入りました座敷の襖ふすまは暗し、また雪と申すのが御存じの通り、当館切つての北国ほくこくで、廊下も、それは怪けしからず陰気だそうでござりますので、わしどもでも手さぐりでヒヤリとします。暗い処を不意に開けては、若いお娘ご、吃驚びっくりもなさろうと、ふと遠慮して立たつせえた。……お通りすがりが、何とも申されぬいい匂で、その香をたよりに、いきなり、横合の暗がりから、お白えりい頸かじへ噛りついたものがござります。」……

「……………」

「声はお立てになりません、が、お桂様が、少し屈かがみなりに、颯さつと島田を横にお振りなす
った、その時カチリと音がしました。思わず、えへんと咳せきをして、御老体が覗のぞいてござつ
た障子の破れめへそのまま手を掛けて、お開けなさると、するりと向うへ、お桂様は庭の
池の橋がかりの上を、両袖を合せて、小刻みにおいでなさる。蝙蝠こうもりだか、蜘蛛やつこだか、奴
は、それなり、その角の片側の寝具やぐべや部屋へ、ござりとも言わず消えたげにござりまするがな。
確たしかに、カチリと、簪かんざしの落ちた音。お拾いなすった間もなかったがと、御老体はお目敏めぎとい。
……翌朝、気をつけて御覧なされると、欄干が取附けてござります、巖いわぐみ組へ、池から水の
落口の、きれいな小砂利の上に、巖の根に留まって、きらきら水が光つて、もし、小雨の
ようにさします朝晴の日の影に、あたりの小砂利は五色ごしきに見えます。これは、その簪たちばなの橘
が薬しべに抱きました、真珠の威勢かにも申しますな。水は浅し、拾うのに仔細しさいなかつたでござ
いますけれども、御老体が飛んだ苦勞をなさいましたのは……夜具部屋から、膠にちやにちや々粘
々を筋を引いて、時なりませぬ蛞蝓なめくじの大きなのが一匹……ずるずるとあとを輪取つて、
舐なめ廻まわつて、ちようど簪の見当の欄干の裏へ這はい込んだのが、屈んだ鼻くしのさきに見えました。
——これには難儀をなすったげで。はい、もつとも、簪がお娘むすめごのお髪へ戻りましたにつ
いては、御老体から、大島屋のお上さんに、その辺のな、もし、従つて、小按摩もそれと

なくお遠ざけになつたに相違ござりません、さ、さ、この上方の御仁でござりますよ。――あくる晩の夜ふけに、提灯を持った小按摩を見て、お煩いなさつたのは。――御老体にして見れば、そこらの行がかり上、死際のめくらが、面当に形を顕わしたように思召しましたらうし、立入つて申せば、小一の方でも、そのつもりでござりましたかも分りません。勿論、当のお桂様は、何事も御存じはないのでござります。第一、簪のカチリも、咳のえへんも、その御老体が、その後三度めにか四度めにか湯治にござつて、（もう、あのお娘も、円鬚に結われたそうな。実は、）とこれから帳場へも、つい出入のものへも知れ渡りましたでござります。――ところが、大島屋のお上さんはおなくなりなさいます、あとで、お嫁入など、かたがた、三年にも四年にも、さっぱりおいでがござりません。もつともお榮え遊ばすそうで。……ただ、もし、この頃も承りますれば、その上方の御老体は、今年当月も御湯治で、つい四五日あとにお立ちかえりだそうでござりますが。――ふと、その方が御覧になつたら、今度のは御病氣どころか、そのまま氣絶をなさろうかも知れませぬ。

――夜泣松の枝へ、提灯を下げまして、この……旧曆の霜月、二十七日でござりますな……真の暗やみの薄明に、しよんぼりと踞んでおります。そのむくみ加減といい、瓢

箆頭のひしやげました工合、肩つき、そっくり正のものそのままだと申すことで……現に、それ。」

「ええ。」

お桂もぞつとしたように振向いて肩をすぼめた。

「わしどもが、こちらへ伺います途中でも、もの好きなのは、見て来た、見に行くと、高声で往来が騒いでいました。」

謙齋のこの話の緒も、はじめは、その事からはじまった。

それ、谿川の瀬、池水の調べに通つて、チャンチキ、チャンチキ、鉦入りに、笛の音、太鼓の響が、流れつ、堰かれつ、星の静な夜に、波を打つて、手に取るごとく聞えよう。

実は、この温泉の村に、新に町制が敷かれたのと、山手に遊園地が出来たのと、名所に石の橋が竣成したのと、橋の欄干に、花電燈が点いたのと、従つて景気が可いのと、儲るのと、ただその一つさえ祭の太鼓は賑うべき処に、繁昌が合奏を演るのであるから、鉦は鳴す、笛は吹く、続いて踊らずにはいられない。

何年めかに一度という書入れ日がまた快晴した。

屋は屋台が廻つて、この玄関前へも練込んで来て、芸妓連は地に並ぶ、雛妓たちに、
 町の小女が交つて、一樣の花笠で、湯の花踊と云うのを演つた。屋台のまがきに、藤、
 菖蒲、牡丹の造り花は飾つたが、その紅紫の色を奪つて目立つたのは、膚脱の緋より、
 帯の萌葱と、伊達巻の鬱金縮緬で。揃つて、むら元はげの白粉おしろいが上氣して、日向ひなたで、むら
 むらと手足を動かす形は、菜畠なばたけであからさまに狐が踊つた。チャンチキ、チャンチキ、
 田舎の小春の長閑さよ。

客は一統、女中たち男衆まで、挙つて式台に立つたのが、左右に分れて、妙に隅を
 取つて、吹溜りのように重り合う。真中へ拭込んだ大廊下が通つて、奥に、霞へ架け
 た反橋そりはしが庭のもみじに燃えた。池の水の青く澄んだのに、葉ざしの日加減で、薄藍うすあいに、
 朧おぼろの銀に、青い金に、鯉の影が悠然と浮いて泳いで、見ぶつに交つた。ひとりお桂さんの
 姿を、肩を、襟を、帯腰を、彩つたものであつた。

この夫婦は——新婚旅行の意味でなく——四五年来、久しぶりに——一昨日温泉へ着い
 たばかりだが、既に一週間も以前から、今日の祝日の次第、献立書がきが、処々、紅の二
 重圈点びらつきの比羅びらになつて、辻々、堀、大寺の門、橋の欄干あちに頭あちわれて、芸妓の屋台やたい囃
 子やしとともに、最も注意を引いたのは、仮装行列の催もよおしであつた。有志と、二重圈点、かさね

て、飛入勝手次第として、祝賀委員が、審議の上、その仮装の優秀なるものには、三等まで賞金美景を呈すとしたのに、読者も更めて御注意を願いたい。

だから、踊屋台の引いて帰る囃子の音に誘われて、お桂が欣七郎とともに町に出た時は、橋の上で弁慶に出会い、豆腐屋から出る緋緘の武者を見た。床屋の店に立掛つたのは五人男の随一人、だてにさした尺八に、雁がねと札を着けた。犬だつて浮かれている。石垣下には、鶯が、がいがいと鳴立てた、が、それはこの川に多い鶺鴒が、仮装したものではない。

泰西の夜会の例に見ても、由来仮装は夜のものであるらしい。委員と名のる、もの識が、そんな事は心得た。行列は午後五時よりと、比羅に認めてある。昼はかくれて、不思議な星のごとく、颯と夜の幕を切つて踊れる筈の処を、それらの英雄客は、髀肉の歎に堪えなかつたに相違ない。かと思えば、桶屋の息子の、竹を削つて大榍形に組みながら、せつせと小僧に手伝わして、しきりに紙を貼っているのがある。通りがかりの馬方と問答する。「おいらは留めようと思つたが、この景気じゃあ、とても引込んでいられない。」

「はあ、何に化けるね。」「颯だ……黙つていてくれよ。おいらが身体をそのまま大風に張つて飛歩行くんだ。両方の耳にうなりをつけるぜ。」「魂消たの、一等賞ずらえ。」

「黙っててくんろよ。」馬がヒーンと嘶いた。いななこの馬が迷惑した。のそりのそりと歩行きある出すと、はじめ、出会ったのは緋緘の武者で、続いて出たのは雁がね、飛んで来たのは弁慶で、争って騎ろうとする。の揉みに揉んで、太刀と長刀ながなたが左右へ開いて、尺八が馬上に跳返った。そのかわり横田圃よこたんぼへ振落された。

ただこのくらいな間だったまが——山の根に演芸館、花見座の旗を、今日はわけて、山鳥のごとく翻した、町の角の芸妓屋げいしやの前に、先刻の囃子屋台が、大な虫籠むしかごのごとくに、紅白の幕のまま、寂寞せきばくとして据すって、踊子の影もない。はやく町中まちなか、一練ひとねりは練廻あまつて剰あます処がなかったほど、温泉の町は、さて狭いのであった。やがて、新造の石橋で列を造つて、町を巡まわりました後では、揃そろつてこの演芸館へ練込んで、すなわち放楽の乱舞となるべき、仮装行列を待顔に、掃清はききよめられた状さまのこのあたりは、軒提灯のきちようちんのつらなつた中に、かえつて不断より寂しかった。

峰の落葉が、屋根越に——

日蔭の冷い細流せせらぎを、軒に流して、ちようどこの辻の向角むこうかどに、二軒並んで、赤毛あかもう氈せんに、よごれ蒲団ぶとんを継つぎはぎしたような射的店しゃてきみせがある。達磨落だるまし、バットの狙撃そげきはつい通りだが、二軒とも、揃そろつて屋根裏に釣つつた幽霊がある。弾丸たまが当たると、ガタリぎらぎら

と蛇腹に伸びて、天井から倒に、いずれも女の幽霊が、ぬけ上った青い額と、縹色の細い頤を、ひよろひよろ毛から突出して、背筋を中反りに蜘蛛のような手とともに、ぶらりと下る仕掛けである。

「可厭な、あいかわらずね……」

お桂さんが引返そうとした時、歩手前の店の、白張の暖簾のような汚れた天蓋から、捌髪さばきがみの垂れ下った中に、藍色の片頬かたほに、薄目を開けて、片目で、置据えの囃子屋台を覗くように見ていたし、先隣さきどなりなのは、釣上げた古行燈ふるあんどんの破やぶれから、穴へ入ろうとする蝮まむしの尾のように、かもじの尖さきばかりが、ぶらぶらと下っていた。

帰りがけには、武蔵坊むさしぼうも、緋緘ひきんも、雁がねも、一所に床屋の店に見た。が、雁がねの臆面おくめんなく白粉を塗りつつ居たのは言うまでもなからう。

——小一按摩のちびな形が、現に、夜泣松の枝の下へ、仮装の一個として顕あらわれている——

按摩の謙斎が、療治しつつ欣七郎に話したのは——その夜、食後の事なのであった。

「半助さん、半助さん。」

すらすらと、井菊の広い帳場の障子へ、姿を見せたのはお桂さんである。

あの奥の、花の座敷から来た途中は——この家やでの北国だという——雪の廊下を通った事は言うまでもない。

カチリ……

ハツと手を挙げて、珊瑚さんごの六分珠ろくぶだまをおさえながら、思わず膠にかわについたように、足首からむずむずして、爪立こづまったなり小褌こつまを取って上げたのは、謙斎の話の舌とともに、蛞蝓なめくじのあとを踏んだからで、スリッパを脱ぎ放しに釘でつけて、身ぶるいをして衝つと抜いた。湯殿から蒸しかかる暖い霧も、そこで、さつと肩に消えて、池の欄干を伝う、緋鯉ひいの鰭ひれのこぼれかかる真白まっしろな足袋はだしは、素足よりなお冷い。で……霞へ渡る反橋そりばしを視みれば、そこへ島田に結った初々しい魂が、我身を抜けて、うしろ向きに、気もそぞろに走る影がして、ソツと肩をすばめたなりに、両袖を合せつつ呼んだのである。

「半助さん……」ここで踊屋台を視みた、昼の姿は、鯉を遊ばせた薄うすもみじのさざ波であった。いまは、その跡を慕おもなまずつて大鯰おおなまずが池から雫しずくをひたひたと引いて襲けはいう氣勢がある。

謙齋の話は、あれからなお続いて、小一の頭われた夜泣松だが、土地の名所の一つとして、絵葉書で売るのは場所が違ふ。それは港街道の路傍みちばたの小山の上に枝ぶりの佳いのを見立てたので。——真の夜泣松は、汽車から来る客たちのこの町へ入る本道に、古い石橋の際に土をあわれに装もつて、石地藏が、苔蒸こけむし、且つ碎けて十三体。それぞれに、櫓しきみ線香を手向けたのがあつて、十三塚と云う……一揆いつきの頭目でもなし、戦死をした勇士でもない。きいても氣の滅入めいる事は、むかし大饑饉おおききんの年、近郷から、湯の煙を慕つて、山さん谷くを這出はいでて来た老若男女ろうにやくなんによの、救われずに、菜色して餓死した骨を拾い集めて葬つたので、その塚に沿つた松なればこそ、夜泣松と言うのである。——昼でも泣く。——仮装した小按摩の妄念は、その枝下、十三地藏とは、間に水車の野川が横に流れて石橋の下へ落ちて、香都良川へ流込む水筋を、一つ跨またいだ処に、黄昏たそがれから、もう提灯つるを釣つるして、裾すそも濡れそうに、ぐしやりと踞しゃがんでゐる。

今度出来た、谷川に架けた新石橋は、ちようど地藏の斜向すじむかい。でその橋向うの大旅館の庭から、仮装は約束のごとく勢揃せいぞろをして、温泉の町へ入ったが、——そう云つてはいかがだけれど、饑饉どし年の記念だから、行列が通るのに、四角な行燈あんどんも肩を円くして、地藏

前を半輪はんわによけつつ通った。……そのあとへ、人魂ひとたまが一つ離れたように、提灯の松の下、小按摩の妄念は、列の中へ加わらずに孤影けいぜん 然として残っている。……

ぬしは分らない、仮装であるから。いずれ有志の一人と、仮装なかまで四五人も誘ったが、ちよつと手を引張ひっぱつても、いやその手を引くのが不気味なほど、正しょうのものの身投げ按摩で、びくとも動かないでいる。……と言うのであつた。

——これを云つた謙斎は、しかし肝心な事を言いわすれた、あとで分つたが、誘うにも、同行を促すにも、なかまがこもこも声を掛けたのに、小按摩は、おくびほども口を利かない。「びい、ぷう。」舌のかわりに笛を。「びいぷう」とただ笛を吹いた。——

半ば聞ずてにして、すつと袖の香とともに、花の座敷を抜けた夫人は、何よりも先にその真偽のほどを、——そんな事は遊びすぎだし一番明あかるい——半助に、あらためて聞こうとした。懸念に処する、これがお桂の場合の第一の手段であつたが。……

居ない。

「おや、居ないの。」

一層袖口を引いて襟冷く、少しこごみ腰に障子の小間こまから覗くと、鉄の大火鉢ばかり、

誰も見えぬ。

「まあ。」

式台わきの横口にこう、ひよこりと出るなり、モオニングのひよろりとしたのが、とま
ずシルクハットを取つて高慢に叩頭おじぎしたのは……

「あら。」

附髻つけひげをした料理番。並んで出たのは、玄関下足番の好男子で、近頃夢中になっている
から思いついた、頭から顔一面、厚紙を貼つて、胡粉ごふんで潰つぶした、不断女の子を悩ませる罪
滅まつしに、真赤まっかに塗つた顔なりに、すなわちハアトのワン一である。真赤な中へ、おどけて、舌
を出しておじぎをした。

「可厭いやだ。……ちよいと、半助さんは。」

「あいつは、もう。」

揃つて二人ともまたおじぎをして、

「昼間つから行方知れずで。」

と口々に云う処へ、チャンチキ、チャンチキ、どどどん、ヒューラが、直ぐそこへ。――
女中の影がむらむらと帳場へ湧わく、客たちもぞろぞろ出て来る。……血の道らしい年増

の女中が、裾長すそながにしろししろしつつ、トランプの顔を見て、目で嬌態しなをやつて、眉をひそめながら肩でよれついたのと、入交いれまじつて、門際へどつと駈出かけだす。

夫人も、つい誘われて門かどへ立った。

高張たかはり、弓張ゆみはりが門の左右へ、掛渡した酸漿提灯ほおずきちようちんも、燦ぱつと光が増したのである。

桶屋おけやの風たこは、もう唸うなつて先へ飛んだらう。馬二頭が、鼻あらしを霜夜にふつつつと吹いて曳く囃子屋台を真中まんなかに、磔こわかくたる石ころ路みちを、坂なりに、大師道みちのいろはの辻のあたりから、次第しだいさがりに人なだれを打つて来た。弁慶の長刀ながなたが山鉾やまぼこのように、見える。御曹子おんぞうしは高足駄、おなじような桃太郎、義士の数が三人ばかり。五人男が七人居て、雁かりがねが三羽揃つた。……チャンチキ、チャンチキ、ヒューラと囃はやして、がったり、がくり、列も、もう乱れ勝がちで、昼の編笠をてこ舞に早がわりの芸妓げいしやたちも、微醉ほろよいのいい機嫌。青い髻ひげも、白い顔も、紅を塗べにつたのも、一斉にうたうのは鱈どじようすくいやすぎふしの安来節である。中にぶつぶつぶつと喇叭うつぱばかり鳴すのは、——これはどこかの新聞でも見た——自動車自動車のつくりものを、腰にはめて行くのである。

時に、井菊屋はほとんど一方の町はずれにあるから、村方へこぼれた祝場いわいばを廻り済すまして、行列は、これから川向かわむこうの演芸館へ繰込くわむもの、いまちようど退汐時ひきしおどき。人は一倍

群つたが、向側が崖^{がけぞい}沿の石垣で、用水の流^{ながれ}が急激に走るから、推^おされて踏^{ふみ}はずす憂^{うれい}があるので、群集は残らず井菊屋の片側に人垣を築いたため、背後^{うしろ}の方の片袖の姿斜めな夫人の目には、山から星まじりに、祭屋台が、人の波に乗って、赤く、光って流れた。

その影も、灯^{とも}も、犬が三匹ばかり、まごまご殿^{しんがり}しながらついて、川端の酸漿提灯の中へぞろぞろと黒くなつて紛れたあとは、イ^{いた}んで見送る井菊屋の人たちばかり。早や内へ入るものがあつて、急に寂しくなつたと思うと、一足後^{おく}れて、暗い坂から、——異^{いぎ}形なもの^{ようもの}が下りて来た。

疣^{いぼ}々打つた鉄棒^{かなぼう}をさし荷^{にな}いに、桶屋も籠屋も手伝つたろう。張^{はり}抜^ぬらしい真黒^{まつくろ}な大釜^{おおがま}を、蓋^{ふた}なしに担^おいだ、牛頭^{ごず}、馬頭^{めず}の青鬼、赤鬼。青鬼が前へ、赤鬼が後^{あと}棒^{ぼう}で、可^お恐^そしい面^{かぶ}を被^かつた。縫いぐるみに相違ないが、あたりが暗くなるまで真^まに迫^つつた。……大釜^{かま}の底にはめらめらと真赤^{まつか}な炎を彩^もって燃^もしている。

青鬼が、

「ぼうぼう、ぼうぼう、」

赤鬼が、

「ぐらッぐらッ、ぐらッぐらッ。」

と陰気な合言葉で、国境の連山を、黒雲に背負^{しよ}つて蹶^{あらわ}れた。
青鬼が、

「ぼうぼう、ぼうぼう、」

赤鬼が、

「ぐらッぐらッ、ぐらッぐらッ。」

よくない洒落^{しゃれ}だ。――が、訳がある。……前に一度、この温泉^{ゆのまち}町で、桜^{さかり}の盛に、仮装会を催した事があつた。その時、墓を出た骸骨^{がいこつ}を装つて、出歯^{でつば}をむきながら、卒堵婆^{そとば}を杖について、ひよろひよろ、ひよろひよると行列のあとの暗がりを縫^ぬつて歩行^{ある}いて、女小児^{こども}を怯^{おび}えさせて、それが一等賞になつたから。……

地獄の釜も、按摩^{おんねん}の怨念^{おんねん}も、それから思着いたものだと思う。一国の美術家でさえ模倣^やを行^やる、いわんや村の若衆^{わかしゅ}においてをや、よくない真似をしたのである。

「ぼうぼう、ぼうぼう。」

「ぐらッぐらッ、ぐらッぐらッ。」

「あら、半助だわ。」

と、ひとりの若い女中が言つた。

石を、青と赤い踵で踏んで抜けた二頭の鬼が、後から、前を引いて、ずしずしと小戻りして、人立の薄さに、植込の常磐木の影もあらわな、夫人の前へ寄って来た。

赤鬼が最も著しい造声で、

「牛頭よ、牛頭よ、青牛よ。」

「もうー、」

と牛の声で応じたのである。

「やい、十三塚にけつかる、小按摩な。」

「もう。」

「これから行つて、釜へ打込め。」

「もう。」

「そりや——歩べい。」

「もう。」

「ああ、待つて。」

お桂さんは袖を投げて一歩して、

「待つて下さいな。」

と釜のふちを白い手で留めたと思うと、

「お熱々。」

と退つて耳を压えた。わきあけも、襟も、乱るる姿は、電燭の霜に、冬牡丹の葉がらくずるようであつた。

四

「小一さん、小一さん。」

たとえば夜の睫毛のような、墨絵に似た松の枝の、白張の提灯は——こう呼んで、さうつむいたお桂の前髪を濃く映した。

婀娜にも優しい姿は、コオトも着ないで、襟に深く、黒に紫の裏すいた襟巻をまいたまま、むくんだ小按摩の前に立つて、そと差覗きながら言つたのである。

棲が幻のもみじする、小流を横に、その一条の水を隔てて、今夜は分けて線香の香の芬と立つ、十三地蔵の塚の前には外套にくるまって、中折帽を目深く、欣七郎が杖をついてゐんだ。

——実は、彼等が、ここに夜泣松の下を訪れたのは、今夜これで二度めなのであった——

↓

はじめに。……話の一筋が齒に挟はさまつたほどの事だけれど、でも、その不快について処置をしたさに、二人が揃よつて、祭の夜を見物かたがた、ここへ来た時は。……「何だ、あの謙斎か、按摩め。こくめいで律儀らしい癖に法螺ほらを吹いたな。」そこには松ばかり、地藏ばかり、水ばかり、何の影も見えなかった。空の星も晃きら々として、二人の顔も冴さえ々として、古橋を渡りかけて、何心なく、薬研やげんの底のような、この横よこ流ながれの細瀧に続く谷川の方を見ると、岸から映るのではなく、川瀬に提灯が一つ映った。

土地を知った二人が、ふとこれに心を取られて、松の方へ小戻りして、向合った崖縁に立つて、谿河たにがわを深く透かすと、——ここは、いまの新石橋が架からない以前に、対岸から山伝いの近道するのに、樹の根、巖角いわかどを絶壁に刻んだ径こみちがあつて、底へ下りると、激流の巖から巖へ、中洲の大巖で一度中絶えがして、板ばかりの橋が飛とび々に、一煽ひとあおり飜ひつて落つる白波のすぐ下流は、たちまち、白昼も暗闇やみを包んだ釜ヶ淵なのである。そのほとんど狼の食い散ちらした白骨のごとき仮橋の上に、陰気な暗い提灯の一つ灯びに、ぼやりぼやりと小按摩が蠢うごめいた。

思いがけない事ではない。二人が顔を見合せながら、目を放さず、立つうちに、提灯はこちらに動いて、しばらくして一度、ふわりと消えた。それは、巖いわの根にかくれたので、やがて、縁日ものの竜燈のごとく、雑樹ぞうきこしずえの梢へかかった。それは崖へ上つて街道へ出たのであつた。

——その時は、お桂の方が、衝つと地蔵の前へ身を躲かわすと、街道を横に、夜泣松の小按摩の寄る処を、

「や、御趣向だなあ。」と欣七郎が、のつけに快活に碎けて出て、

「疑いなしだ、一等賞。」

小按摩は、何も聞かない振ふりをして、蛙かわずが手をくがごとく、指で搜さがりながら、松の枝に提灯を釣すと、謙斎が饒舌しゃべつた約束のごとく、そのまま、しょぼんと、根に踞かかんで、つくばい立たちの膝の上へ、だらりと両手を下げたのであつた。

「おい。一等賞君、おい一杯飲もう。一所に來たまえ。」
その時だ。

「ぴい、ぷう。」

笛くわを銜くわえて、唇を空ざまに吹上げた。

「分ったよ、一等賞だよ。」

「ぴい、ふう。」

「さ、祝杯を上げようよ。」

「ぴい、ふう。」

空 そらうそぶ 嘯いて、笛を鳴す。

夫人が手招きをした。何が故に、そのうしろに竜女の祠ほこらがないのであろう、塚の前に面影に立った。

「ちえッ」舌うちとともに欣七郎は、強情、我慢、且つ執拗しつような小按摩を見棄てて、招かれた手と肩を合せた、そうして低声こごえをかわしかわし、町の祭の灯の中へ、並んでスツと立去った。

「ぴい、ふう。……」

「小一さん。」

しばらくして、引返して二人来た時は、さきにも言った、欣七郎が地蔵の前に控えて、夫人自ら小按摩に対したのである。

「ぴい、ぷう。」

「小一さん。」

「ぴい、ぷう。」

「大島屋の娘はね、幽霊になっちゃったのよ。」

と一歩^{ひとあし}ひきさま、暗い方に隠れて待った、あの射的店の幽霊を——片目で覗いていた方のである——竹^{たけ}棹^{ざお}に結^{ゆわ}えたなり、ずるりと出すと、ぶらりと下って、青い女が、さばき髪とともに提灯を舐^なめた。その幽霊の顔とともに、夫人の黒髪、びん搔^{かき}に、当代の名匠が本質^{きじ}へ、肉筆で葉を黒^{くろ}漆^{ろうし}一面に、緋^ひの一輪椿の櫛^{くし}をさしたのが、したたるばかり色に立つて、かえって打仰いだ按摩の化ものの真^ま向^{っこう}に、一太刀、血を浴びせた趣^{おもむ}があつた。「一所に、おいでなさいな、幽霊と。」

水ぶくれの按摩の面^{おもて}は、いちじくの実の腐れたように、口をえみわって、ニヤリとして、ひよろりと立つた。

お桂^{かんがえ}さんの考^{かんが}慮^えでは、そうした……この手段を選んで、小按摩を芸妓^{げいしや}屋町の演芸館……仮装会の中心点へ送込もうとしたのである。そうしてしまえば、ねだ下、天井裏のぼけものまでもない……雨戸の外の葉裏にいても気味の悪い芋虫を、銀座の真^ま中^{なか}へ押放^{おっぱな}

したも同然で、あとは、さばさばと寢覚ねざめが可い。

……思いつきで、幽霊は、射的店で借りた。——欣七郎は紳士だから、さすがにこれは阻はばんだので、かけあいはお桂さんが自分でした。毛氈もうせんに片膝のせて、「私も仮装をするんですわ。」令夫人といえども、下町娘したまちこだから、お祭り気は、頸脚えりあしに幽かすかな、肌襦袢はだじゆばんほどは紅くれないに膚はだを覗のぞいた。……

もう容易たやすい。……つくりものの幽霊を真中まんなかに、小按摩と連立って、お桂さんが白木の両ぐりを町に鳴すと、既に、まばらに、消えたのもあり、消えそうなのもある、軒提灯の蔭を、つかず離れず、欣七郎が護まもって行く。

芸妓屋町へ渡る橋手前へ、あたかも巨寺おおでらの門前へ、向うから渡る地藏かまの釜。

「ぼうぼう、ぼうぼう。」

「ぐらッぐらッ、ぐらッぐらッ。」

「や、小按摩が来た……出掛けるには及ばぬわ、青牛よ。」

「もう。」

と、吠ほえる。

「びい、ふう。」

「ぼうぼう、ぼうぼう。」

「ぐらッぐらッ、ぐらッぐらッ。」

そこで、一行異形のものは、驚^{あひる}の夢を踏んで、橋を渡った。

鬼は、お桂のために心を配って来たらしい。

演芸館の旗は、人の顔と、頭との中に、電飾に輝いた。……町の角から、館の前の広場へひしと詰^{つま}つて、露台に溢^{あふ}れたからである。この時は、軒提灯のあと始末と、火の用心だけに家々に残ったもののほか、町を挙げてここへ詰^{つま}掛けたと言って可^いい。

そのかわり、群集の一重^{ひとえ}うしろは、道を白く引いて寂^{しん}然としてゐる。

「おう、お嬢さん……そいつを持ちます、俺の役だ。」

赤鬼は、直ちに半助の地声であつた。

按摩の頭は、提灯とともに、人垣の群集の背後^{うしろ}についた。

「もう、要らないわ、此^{ここ}店へ返して、ね。」

と言つた。

「青牛よ。」

「もう。」

「生^さ白^{かな}い、いい肴^{さかな}だ。釜で煮^なべい。」

「もう。」

館の電飾が流るるように、町並の飾竹が、桜のつくり枝とともに颯^{さつ}と鳴った。更けて山^や風^{まわろし}がしたのである。

竹を掉^{ふる}抜^{いぬ}きに、たとえば串^{さか}から倒^{かさ}に幽霊の女を釜の中へ入れようとした時である。砂^す礫^{なつぶて}を捲^まいて、地を一陣の迅^とき風がびゅうと、吹添^{ふきぞ}うと、すつと抜けて、軒^{ななめ}を斜^{ななめ}に、大

屋根の上へ、あれあれ、もの干を離れて、白帷子^{しろかたびら}の裾^{すそ}を空に、幽霊の姿は、煙^{えん}筒^{とつ}の煙が懷手をしたように、遙^{はるか}に虚空へ、遙^{はるか}に虚空へ――

群集はもとより、立^{たち}溢^{あふ}れて、石の点頭^{うなず}くがごとく、踞^{かが}みながら視^みていた、人々は、羊のごとく立って、あつと言った。

小一按摩の妄念も、人混^{ひとごみ}の中へ消えたのである。

五

土地の風説に残り、ふとして、浴客の耳に伝うる処は……これだけであろうと思う。

しかし、少し余談がある。とにかく、お桂さんたちは、来た時のように、一所に二人では帰らなかった。――

風に乗って、飛んで、宙へ消えた幽霊のあと始末は、半助が赤鬼の形相のままで、蝙蝠バットを吹かしながら、射的店へ話をつけた。此奴は禪こいつふんとしにするため、野良猫の三毛を退治たいじて、二月越内証たつきごしなしいしょで、もの置おきで皮を乾ほしたそうである。

笑話の翌朝は、引続き快晴した。近山裏の谷間には、初茸はつたけの残り、乾からびた占地茸しめじもまだあるだろう、山へ行く浴客も少くなかった。

お桂さんたちも、そぞろ歩行あるきした。掛稻かけいねに嫁菜の花、大根畑に霜の濡色も暖い。

畑中の坂の中途から、巨剎おおでらの峰におわす大観音に詣でる広い道が、松の中を上のぼりになる山懷やまふところを高く蛇うねって、枯草葉の径こみちが細く分れて、立札の道しるべ。歓喜天御堂、と指ゆびさして、……福徳を授け給う……と記してある。

「福徳って、お金ばかりじゃありませんわ。」

欣七郎あさはんは朝飯前の道がものういと言うのに、ちよいと軽い小競合こぜりあいがあつたあとで、参詣おまいりの間を一人待つ事になった。

「ここを、……わきへ去つては可厭ですよ……一人ですから。」

お桂さんは勢よく乾いた草を分けて攀じ上った。欣七郎の目に、その姿が雑樹に隠れた時、夫人の前には再びやや急な石段が顕われた。軽く喘いで、それを上ると、小高い皿地の中窪みに、垣も、折戸もない、破屋が一軒あった。

出た、山の端に松が一樹。幹のやさしい、その見晴しで、ちよつと下に待つ人を見ようと思つたが、上つて来た方は、紅藿と粉壁と、そればかりで夫は見えない。あと三方はまばらな農家を一面の畑の中に、弘法大師奥の院、四十七町いろは道が見えて、向うの山の根を香都良川が光つて流れる。わきへ引込んだ、あの、辻堂の小さく見える処まで、昨日、午ごろ夫婦で歩いた、——かえつてそこに、欣七郎の中折帽が眺められるようである。

ああ、今朝もそのままな、野道を挟んだ、飾竹に祭提灯の、稲田ずれに、さらさらちらちらと風に揺れる処で、欣七郎が巻煙草を出すと、燐寸を忘れた。……道の奥の方から、帽子も被らないで、土地のものらしい。霜げた若い男が、蠟燭を一束買ったらしく、手にして来たので、湯治場の心安さ、遊山気分で声を掛けた。

「ちよいと、燐寸はありませんか。」

ぼんやり立停たちとまつて、二人を熟じつと視みて、

「はい、私わしどもの袂たもとには、あつても人魂ひとたまでしてな。」

すたすたと分れたのが、小上りこのぼの、畦あぜを横に切れて入った。

「坊主らしいな。……提灯の蠟燭を配るのかと思つたが。」

俗ではあつたが、うしろつきに、欣七郎がそう云つた。

そう言つた笑顔に。——自分が引添うているように、現在いま、朝湯の前でも乳のほてり、胸のときめきを幹でおさえて、手を遠見かぎに翳かざすと、出端でばなのあし許もとの危あやうさに、片手をその松の枝にすがつた、浮腰を、朝風が美しく吹靡ふきなびかした。

しさつて棲つまを合せた、夫に對する、若き夫人の優しい身だしなみである。

まさか、この破屋に、——いや、この松と、それより梢こずえの少し高い、對ついの松が、破屋の横にややまた上坂のぼりざかの上にあつて、根は分れつつ、枝は連理に連つた、濃い翠みどりの色越いろこに、額を捧げて御堂がある。

夫人は衣紋えもんを直しつつ近着いた。

近づくと、

「あッ、」

思わず、忍しのび音を立てた——見透みすかす六尺ばかりの枝に、倒さかさまに裾を巻いて、毛を蓬おどろに落ちかかったのは、虚空に消えた幽霊である。と見ると顔が動いた、袖へ毛だらけの脚が生え、脇腹の裂目に獣の尾の動くのを、狐とも思わず、気は確たしかに、しかと犬と見た。が、人の香を慕ったか、そばえて幽霊を噛かみちらし、まつわり振った、そのまま、裾を曳ひいて、ずるずると寄つて来るのに、はらはらと、慌あわただしく踵きびすを返すと、坂を落ち下りるほどの間まさえなく、帯腰へ疾とく附くつ着いて、ぶるりと触るは、髪か、顔か。

花の吹雪に散るごとく、裾も袖も輪に廻つて、夫人は朽ち腐れた破屋の縁へ飛とび隕すった。
「誰か、誰方どなたか、誰方か。」

「うう、うう。」

と寝惚ねぼけ声して、破障やぶれ子を開けたのは、頭も、顔も、そのままの小一按摩の怨念であつた。

「あれえ。」

声は死んで、夫人は倒れた。

この声が聞えるのには間遠まとおであつた。最愛最惜の夫人の、消息の遅さを案じて、急せき

心こころに草を攀よじた欣七郎は、歓喜天の御堂より先に、たとえば孤屋ひとりやの縁外えんそとの欠けた手水鉢うずばちに、ぐつたりと頤あごをつけて、朽木の台にひざまずいて縋すがつた、青ざめた幽霊を見た。横よこざまに、杖ステッキで、敲たたき払はらつた。が、人氣ひとげ勢はいのする故障やれしやうじ子を、及および腰びごしに差さ覗のぞくと、目よりも先に鼻を撲うつた、このふきぬけの戸障子にも似ず、したたかな酒の香である。酒さけぎらいな紳士は眉をひそめて、手巾ハンケチで鼻を蔽おほいながら、密そつと再び覗のぞくと齊ひとしく、色いろが變まつて真蒼まっさおになつた。

竹の皮散り、貧乏徳利の軋ころがつた中に、小一按摩は、夫人に嚙かじりついていたのである。読む方は、筆者が最初に言つたある場合を、ごく内端うちわに想像さるるが可いい。

小一ずみに仮装したのは、この山の麓ふもとに、井菊屋の畠の畑づくりの老僕と日頃懇意な、一ひとり人棲ずみの堂守であつた。

大正十四（一九二五）年三月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十二巻」岩波書店

1940（昭和15）年11月20日第1刷発行

※疑問点の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：今井忠夫

2003年8月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

怨霊借用

泉鏡花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>